

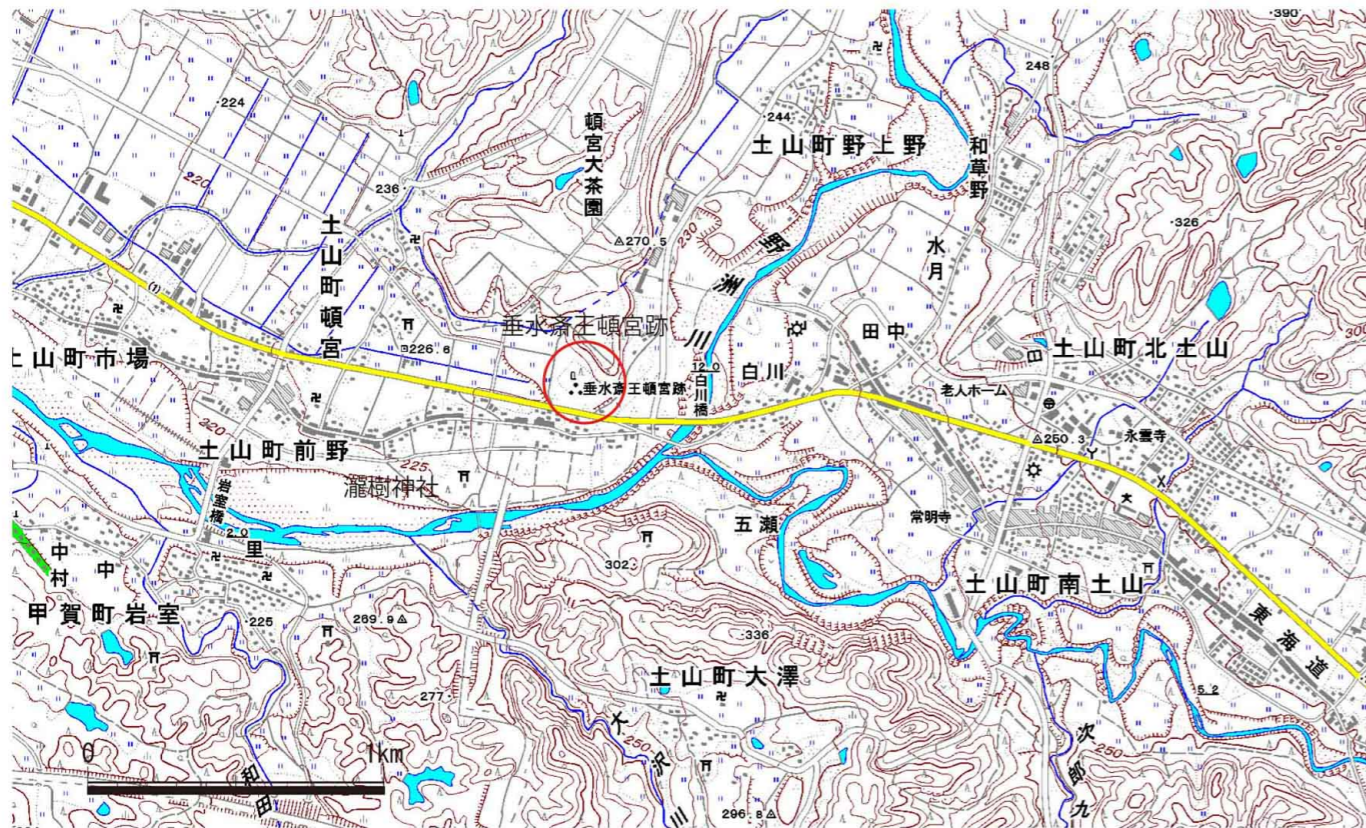
周辺の
みどころ

土山宿本陣跡は、江戸幕府3代将軍家光の上洛の際設けられたもので、宿帳など当時使用していたものが残っています(要予約・300円)。また、東海道や宿・伝馬制度をテーマにした展示を行う東海道伝馬館(無料)、土山の「道」とのかかわりをベースに資料展示を行う土山歴史民俗資料館(無料)もあります。

厄除けで有名な征夷大将軍坂上田村麻呂を祭神とする田村神社も近隣にあります。足を延ばすと、国道1号線鈴鹿トンネル入り口の真上に高さ5.5mの巨大な万人講常夜燈をみることができます。



鈴鹿峠の万人講常夜燈



[アクセス]

- JR草津線「貴生川駅」下車
バス 30分 白川橋下車徒歩約5分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
(関連文献/関連施設)

- 神英雄『阿須波道と垂水頓宮』土山町、1996年

さいおうぐんこう
齋王群行
甲賀市土山町頓宮ほか



国史跡垂水齋王頓宮

天武朝以降南北朝期に至るまで、天皇に代わって伊勢神宮を祀り奉るため、未婚の内親王あるいは女王が齋王として選ばれ、伊勢神宮にほど近い伊勢国多気郡に所在する齋宮に赴いた。都から伊勢への旅は群行と呼ばれ、齋王に仕える官人・官女に加え、京極まで見送る勅使など500人を越える壮麗なものであった。

一行は、近江国の勢多・甲賀・垂水、伊勢国の鈴鹿・一志に設けられた仮設の宮、頓宮に宿泊し、5泊6日の行程であった。途中6ヶ所の川での禊など、清らかな水を求めての旅でもあった。





垂水齋王頓宮跡の石碑



現代に再現された齋王群行（あいの土山齋王群行実行委員会 提供）

齋王群行

所在地 甲賀市土山町頓宮ほか

伊勢神宮と齋王

齋王は、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替りごとに皇族女性の中から選ばれて、都から伊勢に派遣された。

制度上最初の齋王は、天武天皇（670年頃）の娘・大来皇女。制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330年頃）まで約660年間続き、その間記録には60人余りの齋王の名が残されている。

齋王の宿命

群行にあたって、天皇は、齋王の額髪に小さな櫛を挿し、「都の方におもむきたもうな」と告げる。この儀礼は、はつけん発遣儀式のクライマックスともいべきもので、平安文学の中では「別れのお櫛」という名で呼ばれている。

齋王がその任を解かれるのは、天皇の譲位・崩御、齋王自らの病、肉親の不幸などの場合に限られていた。それ故、再び生きてまみえることは無いかもしれないという悲劇的な別れで

あったのだ。

齋王を彩る文学

齋王は、ただ悲劇的な存在であった訳ではない。

『伊勢物語』第六十九段「狩の使」では、齋宮を舞台に、齋王やすこ恬子内親王と在原業平とおぼしき「男」のはかない恋が描かれているほか、朱雀天皇の代に齋王にぼくじょう卜定されました「齋宮女御」ことよしこ徽子女王は、三十六歌仙のひとりに数えられ、歌集『齋宮女御集』を残している。

齋王は、神に仕える未婚の皇女という特殊な立場にあったことから、王朝文学に登場したり、そのモデルとされることがしばしばあった。平安時代後期には、宮廷の歌人が参加する歌合わせが齋宮で催されるなど、華やかな文学の主人公であったことがしられるのである。



瀧樹神社付近の野洲川



白川神社付近の野洲川



禊をする齋王（あいの土山齋王群行実行委員会 提供）

齋王群行と頓宮

5泊6日の群行の宿泊地である近江国勢多・甲賀・垂水、伊勢国の鈴鹿・一志の頓宮の所在地のうち、その所在が明らかとされているのは仁和2年（886）から長和5年（1016）の間に設けられた垂水頓宮のみである。

垂水頓宮は、国道1号に沿った茶園の広がる丘陵のただ中にある。数多くの伝承が残されていることから、東西64m、南北73m、高さ1mの土塁に囲まれた範囲がそれであるとされ、「たるみさいおうとんぐうあと垂水齋王頓宮跡」として昭和19年6月26日に国の史跡となった。

ただ、頓宮は数多くの建物が建てられていたことが分かっていることから、関連する施設は

指定地周辺に広がっているものと考えられている。

清らかな水を求める旅—齋王群行—

垂水齋王頓宮跡の近隣には、齋王が野洲川にて禊ぎを行ったという伝承を持つ瀧樹神社や白川神社がある。

現在、例年3月に「あいの土山齋王群行」が行われており、ここでも群行に先立って「禊ぎ式」が執り行われており、最初のクライマックスとして演出されている。

神に仕える齋王にとって、群行とは清らかな水を求める旅でもあったのである。